

談話室

第1回日韓合同表面分析シンポジウム報告

田中彰博

アルバック・ファイ(株)
 ☎ 253 茅ヶ崎市萩園2500
 (1996年6月25日受理)

1st Korea-Japan Symposium on
Surface Analysis

Akihiro TANAKA

ULVAC-PHI, Inc.
 2500 Hagisano, Chigasaki, Kanagawa 253

(Received June 25, 1996)

1996年2月28日から3月1日までの3日間にわたり、第1回の日韓合同表面分析シンポジウムが、ソウルの淑明(Sookmin)女子大学で開催された。韓国真空学会(KVS)に併設する形で開催されたものである。日本側から16件、韓国側からは15件という合計31件の発表があった。これに先立ち、一日目の午前中は、KVSのPlenary Lectureであった。カリフォルニアのMichael van Hoffが招待されて、なぜ氷が滑るのかという話題を中心に話をした。もう一人は韓国の半導体産業の現在の状況についてまとめたもののようであった。残念ながら韓国語の話とハンダ文字のOHPでは、筆者にはわからなかった。

日韓合同シンポジウムは、同じ日の午後からであった。一日目の午後に11件、二日目に20件の発表があり、三日目はソウル近郊のエクスカージョンであった。

日本側からは韓国語で挨拶をしてから本発表に入るものが多く、つられて韓国側も日本語で挨拶をしてから発表に移る例もあり、終始、和気あいあいとした雰囲気包まれた。互に通じない英語を使うので、十分に内容にまで至らないことを危惧したが、まったくの杞憂であった。むしろ、早口でまくしたてるNative Englishがないことで、はるかに良い理解と交流が得られたようにさえ

感じられた。会場は立ち見が出るほどの盛況であり、日本で表面分析が使われ始めた頃のような熱気を感じた。

発表者の所属分布から国情を推測すると、日本からの発表は、国公立研究機関4件、大学1件、民間企業11件、となっており、表面分析が産業の中に浸透している様子が良く現れている。これに対して韓国の場合には、国公立研究機関が8件と過半数を占め、大学2件、民間企業5件である。民間企業はLG Electronics(金星)とSamsung(三星)の二社だけであった。まだ表面分析が広く利用されるまでには至っていないように思う。

29日夕刻の交流会では朴真空学会会長も、初めてVarianのオージェ電子分光器を購入された頃のことを話し、ご自身も表面解析分野にあることを話したくて仕方がない様子であった。挨拶が長くなり引き留められる一幕までであったほどである。

小さいながらも、教室二つを利用した展示会も開かれた。会場には、お湯のサーバー、紙コップ、コーヒー沸かし、朝鮮人参茶の顆粒などが置かれ、見学者は好みの飲み物を手に持って暖をとりながら見て回る。昼休みには、数十人がいた。韓国の場合、表面分析および真空関係は輸入が中心であり、日・米・欧各社の代理店が軒を連ねた。そうした中で、ただ一社ではあったが、Windows上でAFMを動かし、データを解析する韓国独自のプログラムを展示していたことは、筆者の目をひいた。

二月末のソウルは、冬は過ぎたといってもまだ寒い。本館前の池には終日氷が張っていた。一日目午後のセッションでは、暖房が行き渡らなかったこともあり、全員が震えていた。二日目には強い暖房が入るようになったが、後方では、汗をかくほどだった。そのためか、時差呆けはまったくないにもかかわらず、一日目にはほとんどなかった白川夜船の御仁もあった模様である。

終始会議を盛りたて、是非とも韓国から日本で開催されるPSA98にたくさん参加するようにという挨拶を下した朴真空学会会長、会議を主宰して日本の一行を何くれとなく面倒を見て下さった文博士、日本に留学していた縁で一行の食事回りの面倒をすっかりお願いしてしまった姜教授の方々には特にお礼を申し上げたい。